



第貳

6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 3

始



亞非利加 三十五日間空中旅行卷の貳

英國 チュールス、ベル子氏原著

日本 井上 勤 譯述

渡邊 義方 校正

第五回

旅行者守夜羅大熱

輕氣球避霧昇最高

却而説くケチシ一氏の頻に氣球の方向を南に向て進めるなりと思ひ
の外地圖に照して之を考がふれば西方に進行たるとを發見し且つ昔
時大膽なる旅行者の搜ね素めたる道筋も併せて識得たれば邊兒月孫
氏始めケチシ一氏及びジョーエまで案外の満足を得たりけり此夜の
爰に氣球を停めて泊るとに決したるものから野蠻猛獸が不意に襲ひ
來るも知れぬバ夫等の用心に交るく夜番をせんとて夜の時間を三
に分ち各々其三分一を受持ち二人眠に就て一人の常に見張番を爲す

とに取極め邊兒月孫氏の時計を見れば時既に九時に垂とす先づ第一
の邊兒月孫氏にして甲夜を守り「ケネジ」氏の夜半を受持ち「ジョーエ」
の午前三時より翌朝迄の請持と定まりければ「ケネジ」氏及び「ジョーエ」
二の直に銘々の毛氈に身を包み兩人均しく天幕の下に横はり最と快
よく眠に就き徹夜交代して各々張番をなし十二分の夢を空中に結び
て該夜の何事もなく明渡り翌れ日曜日の朝となり邊兒月孫氏の疾
く起出て曉方番の「ジョーエ」と共に神拜の式を終りたれど「ケネジ」氏
の如何しけん疾に目覺も居るものから身体大に疲勞て熱氣強く惡寒
を催し頭腦痛て起出がたく心地死ぬべく覺たり
此日天氣俄に變じ見る／＼黒雲天に漲り恰も磨墨を流せし如く沛然
として暴雨を降し風さへ殊に強して大洪水を起さんとするの氣勢な
り开も此處の「ザンゴメロー」と稱し實に最惡なる邦土にして一年三百

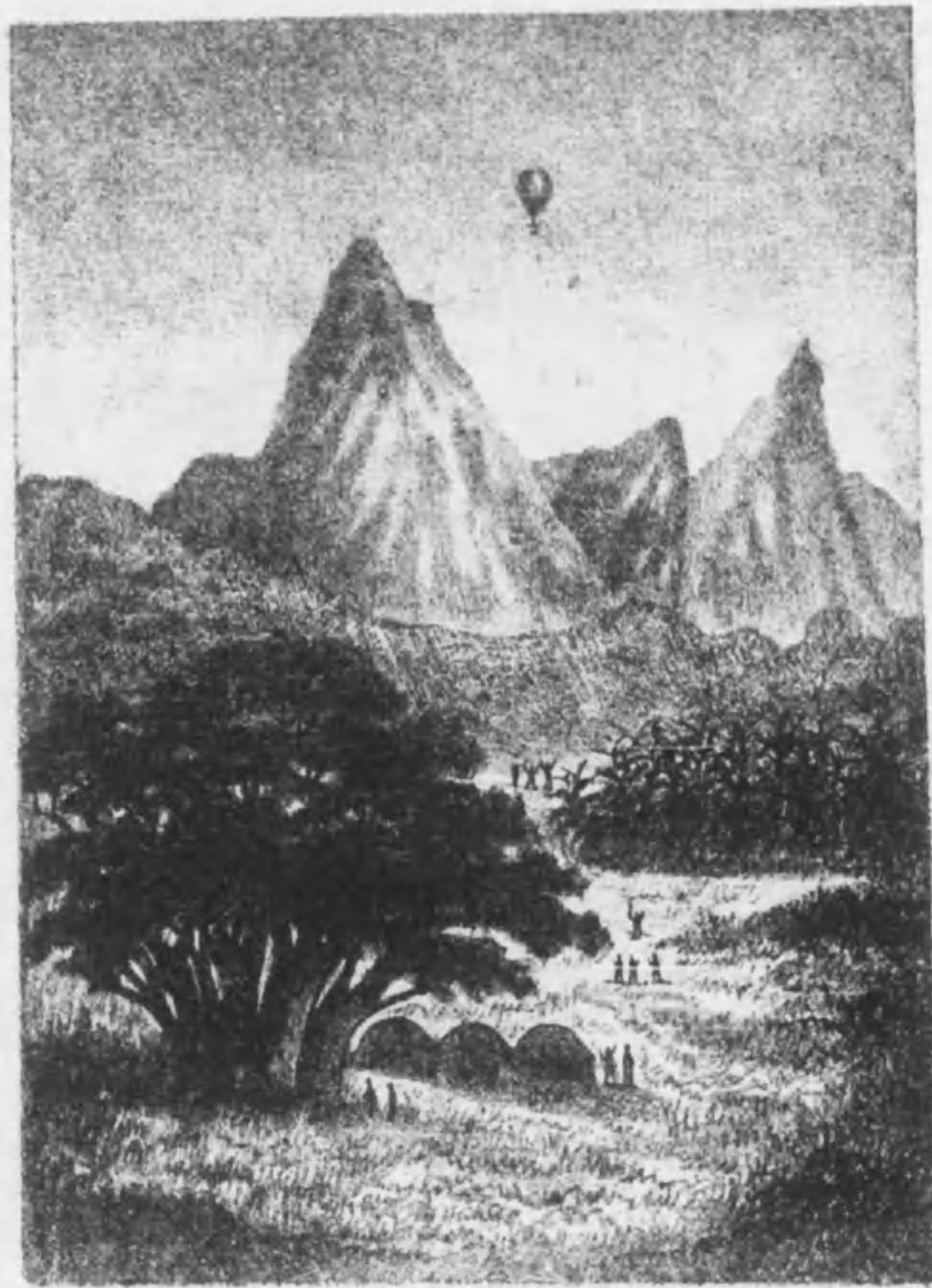
六十日間晴朗なる日は稀にして月の内二十日乃至二十四五日は不
霖雨を降すの地なれば氣候の温冷定まらず人身の健康に害あると推
て知るべし暫時ありて雨いよ／＼強く風ますます／＼烈しく三人の旅
者は雨に撲れ風に吹れ頗る困難を極つ、齊一く下界を俯望ば路は已
に碎破れて一條の溪流をなし其流の迅きと矢を射る如く此急流を土
人の語に「ニユルラース」と云ふ溪水急流の意なり路上はこの急流の爲
に人の往來を止むるの有様にて土人は之を塞んどなすにや刺多き灌
木或は巨大なる「リヤナス」樹を持來りて之を遮り止たり而て此急流は
曾て「バートン」氏が云る如く硫黄の噴出物たるを發見たり邊兒月孫氏
曰く彼の「バートン」氏が言虚詐ならず爾ば又同氏が云る草叢の中に幾
個となく人の屍骸の累々たるを見たりと云るも亦た信ずるに足るべ
きなり「ジョーエ」曰く實に恐るべく憎むべきの地方なり余思ふに「ケネ

四
ジ一氏の熱病も斯る猛惡の地否空中に一夜を經過しゆる其惡氣に侵され熱病に罹りしなるべしと其言未だ終らざるにケテジ一氏は苦き息を吐わへず眞に汝が言處の如しと啣つを聞て邊見月孫氏はケテジ一氏の病を慰め开は敢て驚くに足らず元來此所は亞非利加洲中に於て最も不健康なる地方の一なり耐る間に我等は長く此處に滞在るべからず將に氣球を飛して翔り去んとすと詔るを聞より心狀至て伶俐き「ジョーエ」は邊見月孫氏が指揮を待たず迅くも身く霞せて乘輿を下り樹枝に結び付たる錨を外して再び復た梯子を攀て乘輿の中に立戻りけるに二人は始て「ジョーエ」が錨を外し梯子を攀げ既に進行の準備を整へたるを知り其素迅さ働きを譽稱し頓て邊見月孫氏は球中の瓦斯を勝脹せしむるに従ひ氣球ピクトリヤ号は飄々然として空中の旅行を始め風力轉た氣球を吹て其の運動に巨大なる速力を與へたり看

五
る眼も遠き下界には惡病を醸成べき妖霧一帯に掩ひ籠て點々の茅屋區々の山林原野も眼界に顯没して十分に見えわかず氣球の經過に従かふて下界の景色に著るしき變動を來せり开も亞非利加洲は不健康なる惡地ありて次に全く病氣なく豊饒なる良地あり又た次には惡むべく恐るべきの惡氣を以て蔽はれたるの地方あり斯の如く良惡の土在犬牙相交るを以て景色も亦た從つて變化せざるを得ずケテジ一氏は餘程病勢強き有様にて元來強壯なる身体も熱力の爲め勝を制せられしと見え頗る疲勞の体を現し他の視る目も苦し氣なり邊見月孫氏は同氏の顔を視て只微笑て居たりければケテジ一氏は不滿の面色にて最怨めし氣に云るやう我熱病の申戯にあらす實に人世に病程悲しきものはあらずかし然るに足下は我を見て樂し氣に笑はるゝは友の病氣を憫まで人の惱を喜ばるゝかあな無情と言懸て天窓から旅氈を

冠り天幕の下に打臥しまゝ黙然として詞なし邊兒月孫氏曰く我親愛なる「ジツク」の名よ今暫く耐忍したまへ足下の病は速かに全癒べき手段ありと聞いて「ケチジ」氏は思はず重き頭を擡て曰く君に其術あるならば速かに施したまはれ君が藥籠中に貯へられたる藥餌の中に良劑あらば取出て與へたまひぬかし君が藥籠は我が足邊に在り余は君が與へ玉ふ所の藥餌は其向たるを擇ばず如何程服惡くとも眼を閉ぢ口を開きて只一呑に服すべし邊兒月孫氏曰く余の療法は藥餌を服を要せず一種特別の驅熱藥を以て足下に施さんどす其驅熱藥とは他にわらず直に我等の身体を害せざる雲霧の上に氣球を昇騰しめ惡病の原因なる惡質の空氣を死れ去るとなり余は將に此の良藥を作らんとす唯僅に十分時間の猶豫を與て水素瓦斯を膨脹せしめよと言つゝ火力の度を増ば氣球は急に上昇て雲雨を貯へたる空中の部分を離

て遙に其上に進路を取りたり邊兒月孫氏は「ケチジ」氏に對ひ足下僅に一分時間を待たば純粹の空氣を呼吸し大陽の熱力を感覺するに至るべしと告る傍から「ジョーエ」は不意に大聲を發して呼んで曰く果して旦那の言ふ如くなれば實に不可思議の奇功藥にて驚くにも尙餘りあり邊兒月孫氏答て曰く汝何ぞ不學なる是自然の道理にして奇と驚ろき怪と稱するに足らず余は常に歐羅巴洲のみならず其他の邦國に於て毎日に此事を目撃したり我療治は唯だ患者を身体の健康に適せる大氣中に伴ふのみ「ケチジ」氏の此時既に熱去て過半全快に及びたれば氣色忽ち元に復し喜び勇みて云るや現に此氣球の我爲の一小安樂國なり此時「ジョーエ」の何物か認たりけん甚だ心配の体にて我等の矢張此方針に向て旅行するやど其言未だ終らざるに點々黒雲聚つて大塊となり散じて無數の小點となり又散じ又聚り聚散離合變幻出沒氣



野蠻人土手ヲ舉テ氣球ヲ捉フヘン

球の下に轉々して渦卷上る稀代の景色の實に名狀すべからざるの奇
 怪なり雲の全面の太陽の光線に反射して氣球を射ると最も強く熱力
 殆ど堪えがたきを以て氣球ピクトリヤ号の尙ほ上方に向ひて昇ると
 少時にして終に高さ四千尺の點に達し寒暖計の温度著るしく降下た
 り已に三人の旅行者が此の最高點に昇騰たるゆるる全く土地を見るあ
 たはず西方大約五十里計距たる處に「ルベホ」山の高嶺雲に聳え恰も禿
 頭の大人空中に屹立たる如く經度三十六度二十分の處に當て「ウゴゴ」
 の地方を境界せり焉に風勢強して氣球を吹送ると尤も迅く其行程一
 時間に凡る二十英里を駛るの割合なれども空中旅行者は少も其速力
 なるを感ぜざるのみならず猶遲きが如くに覺たり斯て三時間を過て
 後「クナシ」氏は熱氣全く消散し食慾餘程加はりたれば始めて邊兒月孫
 氏が前言の當れるを感嘆して止まず歡喜の聲を發して曰く諸々感謝

の至なり此良薬は硫酸規尼に優れると遠し「ジョーエ」曰く余漸く年老
たらんには此氣球の中に我が晩年を終るべしと思ふ時正に午前十時
黒雲全く散じて空中一個の班點なく四顧蒼々青一髪只空氣の色を看
るのみ大氣將に其惡質を變じたれば「ピクトリヤ」號は漸々降下始め稍
や下界に近づくまゝに邊兒月孫氏は今暫し北東に進まん爲めに一層
強き空氣の流動を待ち受け地を距るゝ六百尺の處まで降りし頃大氣
忽ち北東に向つて強き流動を起したり下界の景色は一變して山多く
丘多く赤土不毛一物を生ぜず「ザンゴメロー」の地方は遠く東に去て眼
界を離れ該地々方の緯度に生ずる椰子樹も赤共に見えざりぬ斯て
尙進む程に峻嶺冗突忽ち現れ忽ち消え劍の如く槍に似たる岩角近く
前に聳へ或は左右に遮りて將に氣球に觸んどす危険を冒て戦々兢兢々
薄氷を踏み白刃を渉るの心地して空中旅行者の三人は齊一く眼を八

方に注ぎ寸刻分時も油断なく此危険を避るとを勉たりケテシ「氏忽ち大呼して曰く我が今の進路には我が氣球を破壊るべき障碍物多く横ばりて其危険なると言語に盡し難し寸時も油断すべからず邊兒月孫氏應て曰く否々決して憂ふるに足らず我等の必らず是等の障碍物を避て無事に旅行すべしと乃ち同氏の驚くべきの手續を以て巧妙に氣球を運轉しながら徐々に脱出して曰く如何に「シツク」よ我等の若し此下界に見ゆる深泥の地を歩いて旅行したらんに一「日」僅に二三英里を奔るに過ぎず若し果して然らんには「ザン」ジ「パール」島を發程してより今頃の疲勞の爲に必らず生命を落せしなるべし好し生命を全たふするも許多の怪物に遭遇ひ野蠻猛獸の害毒に苦しめられ晝の濕氣を受て惡疫に罹り或は太陽の酷熱に苦しみ夜に在ては屢々非常の凍寒に侵され又は毒蠅の毒刺に刺されて厚き衣服も之れを防ぐに足らず

疼痛の堪へ難きに苦惱て九死一生の死地に濱し現世からなる地獄に落ちて幾千の艱難辛苦を嘗たるなるべし然るに此「ピクトリヤ」の夫等の憂患毫もなく自由に空中を飛翔て人の尤も難とする「亞非利加」内地の實況を容易く觀察し得ると云ふ實に満足に堪ざるなり「ジョー」エ「傍」らより曰く余の斯の如き聞だも戰慄べき難事を試むるを欲せず邊兒月孫氏曰く余の一事として針を認め棒となし丘を山と爲て語るが如き虚言を吐を欲せず余の言真なり余の説實なり余の曾て此殘忍ある「亞非利加」内地を搜索せんと試みたる大膽旅行者が其艱難に遭遇せる状態を記たるの書を讀むに當りてや葉々章々字々句々毎に涙襟を濕ほし巻を掩ふて嘆せざるいなし

第十一時氣球「ピクトリヤ」号の「インメンゲ」の海灣に至り遙に下界を見俯すに小丘處々に散布し丘の上には夥多の野蠻群をなし手を擧て

我氣球を捉へんと試み或の石を擲ち或の斧を上て我を威すなど其有様の愚鈍なる實に失笑に堪たり暫時にして荒蕪たる地の上に飛來り前に聳し高山のウサガラ山脈中の最も高點に位せるものなり邊兒月孫氏大呼して曰く宜く注意よ我等の將にリュエベホに近かんとすリュベホなる詞の邦語にて風道と云る意を徴はす者なり我等の此高嶺を飛超んとするに今一層高く昇らざるべからず我が所持せる此地圖に若し一點の差違あらざらしめば我等の少くも五千尺以上の高點に昇らざるべからざるなりケネジー氏問て曰く我等は屢々斯る高點に昇らざるべからざるや邊兒月孫氏答て曰く否斯る高點に昇るの甚だ稀なることなり凡ろ亞非利加洲中に兀立せる高山峻嶺の之を歐羅巴及亞細亞洲の諸山に比すれば中等の高にして敢て驚き恐るゝに足らず爾れば我ビクトリヤ号は亞非利加洲中の高山を飛越るは一も

難き事にわらずと云つゝ、電の火力を増ば球中の瓦斯は忽ち膨脹て氣球は著るしく上方に向て其進路を取たり斯く瓦斯の膨脹るも決して氣球の破裂すべき等危険きと毫もなきなり何となれば此六千尺の高點に昇るも風雨針は僅に八英寸餘降下しのみ即ち氣球は未だ四分の三丈膨脹たるのみなればなりシヨリエ曰く我等は尙ほ此方向に上行するや邊兒月孫氏曰く我がビクトリヤは尙ほ高く天上に昇るを得べし开も地球を包たる大氣は其高さ三万六千尺に達するものなり曾て「ブリチヌスキ」ゲイ、リュサツク」の二氏は氣球に駕て上行し共に其口耳より血液の流出て呼吸の已に尽る處にまで到たり此は是れ數年前の事なるが「パラル」氏及「ビキシ」氏と稱る大膽なる二人の佛國人あり大空上り得る處まで昇らんと試みたるに氣球終に破裂したりと語るを聞よりケネジー氏は愕然色を作て曰く氣球破裂したらんには彼の二

人の佛國人は定て墮落したるなるへし邊兒月孫氏曰く固より墮落せざらんや然れども該二人は豫じめ其準備をなし墮落どきの難を避るに最も伶俐く尤も巧妙なりしたため地上に墮落たりしも全く其身に恙あかりしは實に僥倖と謂まくののみ

大空六千尺の高點に至ては大氣の集合頗る減却し音響を通ずると甚だ困難にして尋常の聲にては彼我の談話も聞取がたく物を見るに其形狀混雜して判然ならず眼界に入來る物いづれも糝糊として土塊の如く下界の人獸の全く見ゆるなく道路は細して恰も一條の帶に似廣大なる湖水は狭小き水溜の如し斯れば空中旅行者の三人は餘程其身体に變化を覺へ氣分頗る悪く大氣の流動は非常の速力を有ち乾燥なる高山を超て氣球を高く吹送り揚々乎として止まらず此高山の宛ら白髮の老人に似て常に頂上に白雪を戴き太陽の其光線を直下して該

高山の白頭を射る此時邊兒月孫氏の筆を操て諸山の眞景を寫し併て「ピクトリヤ」號が進行の形容を描き居たり爾程に「ピクトリヤ」號の「リュベキ」山に對する高嶺を降りて森林多く暗黒綠色の樹木を以て蔽ひたる山側を経過せり時に崔嵬たる山嶺氣球の前面に當り山上に「ウゴ」地方に横はる沙漠に通ずるの凹たる一條の道あり稍や山嶺を降て黄色の平原を見るのみにして地面の熱力の爲に破壊け甲首乙首に點々生ずるの唯鹽氣を含蓄たる植物と刺多き灌木あるのみ氣球と相對せる處を遠く見るに小灌木の叢を爲せるもの許多ありて山側を蔽へり已にして之に近づき見れば皆な巨樹大木の森を爲せる者なり爰に至り邊兒月孫氏の氣球を降下しめ已に樹梢に近寄たる時上より三箇の錨を脚と氣球を停めんとしたるに早くも其一箇の「スカモール」と稱する大樹の枝に掛りたり「ジュリエ」の錨の礎と樹枝に纏ひたるやを

見届けんとして繩梯子を降りし夫を傳ふて下に降立ち邊兒月孫氏の熱力を減じて僅に氣球を空中に浮得る位の度に爲したり此時風の全く死して樹枝さへに鳴すとなし邊兒月孫氏曰く吾友「シツク」よ足下今より此鳥銃二挺を携へて下界に降り一挺の之を「ジョーエ」に與へ共に羚羊を狩得て宜く我晚餐の下物となすべし「ケチシ」氏の兼てより最も好める業なれば覺えず大呼して曰く余も既に行んと思へり君一人にて淋からんが暫時の間留守したまへと言もあへず身を起て已に乘輿を越て下界に降りたれば邊兒月孫氏の二人が乘輿を去て後重量大に減じ全く熱力を要せざるに因て竈の火を打消たり「ジョーエ」の下界より大呼して曰く我が旦那よ君決して吾等を置去り獨り飛去が如き惡心をな出したまひろ邊兒月孫氏笑ふて曰く餘計な心配せずもわれ我が氣球の樹板に纏ふて飛去となし且つ我の汝等が留守の間に樂んて

日記を整へ之を後日に残すの準備をなさんとす汝等が遊獵の頗る汝等が快樂なりと雖も能く其身を注意すべし我が位置の高くして地方總体を一目に見るを得べきにより若し何まれ疑ひしき者を發見なば直に我が施條銃を放つべし一發の砲聲の汝等が急に歸るべきの暗号なり努々忘るゝとなかれと示せば「ケチシ」頻に黙頭き大呼して答て曰く承知せり〜と直に「ジョーエ」を作ふて樹立間なき茂林の中に入かと思へば忽ちに影さへ見えずなりにける

第七回

入虎穴獲羚羊

護氣球倒猿猴

却て説く此地方の土地乾燥にして太陽の熱力に焦げ皆陶土質にして地面悉々裂碎け其狀恰も沙漠の如し此首乙處に人獸の枯骨太陽の熱度に晒され沙漠の烈風に因て細き沙と相混淆り點々落々轉動するを見る此人間の白骨の必ず不幸なる隊商の横死せるものと思はれた

り既にして「ケチジ」并に「ジョーエ」の兩人の半時間餘も歩み來て護謨樹の大林に達したれば迷に手を携へて林中に入り眼にの時計を見指には引金を注意し徐々的に進みたり「ジョーエ」の未だ曾て一發の鳥銃をも放ちたるとなげれど能く鳥銃の取扱ひ方を合點し確術熟練の人に異ならず「ジョーエ」曰く此地獄の如き惡地を歩むと既に遠し余の頗る行歩に倦たりと談話に心を奪はれて足元に注意せず巨石に躓きて咄嗟轉倒んとして踏止まりアナ危ふしと嘆きぬ「ケチジ」氏の笑を忍び「ジョーエ」よ足に麵包を與へざりしか能く注意せよと云つゝ急に聲を低め靜るべしと告知せ默然として佇立たり二人の犬を伴はずして待するとゆゑ頗る困難なきにわらず假令「ジョーエ」が伶俐にして何事に敏捷きも素より「セツター」犬或の「ポインター」犬の如き鋭敏なる鼻を有ざれば狩に掛ての何の役にも立ず茲に水溝なるべく水靜まりて流

れざる處ありろの頭に數十頭の羚羊群をなして其鬪を醫する有様なり各羚羊は其危難を注意するにや絶ず頭を擧て四下を回顧し一飲一顧一吸一回寸分時間も靜止らず常に鼻と口を揺動して二人が停立る方向より吹來る涼風を吸込み毫末も油斷なき体なり顧ての事に「ケチジ」は身を潜せて羚羊に近寄り巨大なる岩石の背後に進み「ジョーエ」は依然息を殺して元の處に停立たり距離近くなりければ矢的はよし「ケチジ」は轟聲一發羚羊を射る響と共に羚羊は宛がら蜘蛛の子を散すが如く瞬く間に逃失て影も止めずなるものから唯羚羊の牝一頭肩部を射られて動き得ず四足折て倒れて在り「ケチジ」は勇み立ち我物獲つと一散に走り近付き鳥銃の臺尻もて撃殺し見れば羚羊の一種にして頗る美麗を極めたる野獸なり其色は茶褐薄藍を交え腹部と脛部の内部は白きと雪を欺むくばかり「ケチジ」曰く我が放ちし彈丸は頗

る狙を誤またず世にも稀なる獲物なれば余は此皮を剥て蓄はへんど欲す「ジョーエ」問て曰く君は眞に其皮を蓄はへんど欲するか答へて曰く看よ此皮の美麗なるを蓄へんと勿論なり「ジョーエ」曰く邊兒月孫氏は氣球に積込べき重量は豫て定めたる如く決して増減するを許さざれば假令君が此皮を剥たまふとも氣球に積込むとの出来ざるを奈如にせん「ケチジョー」氏曰く汝が言ふ所眞に然り然れども斯く美麗なる野獸を獲ながら全く捨て顧みざるは誠に遺憾の至なり「ジョーエ」曰く全く之を捨去か嗚呼惜むべし惜むべし我等は此野獸が有せる滋養分の肉を持歸らん君若し我に許したまひや余が曾て倫敦府に在て我且那の料理人たりし時の庖丁加減を以て之を料理せんとす「ケチジョー」答て曰く我良友よ其事甚だ容易なり汝知らずや獵師の皆な禽獸を屠るに巧妙あるを余の之を皮剥こと之を射殺すの早きよりも尙早し

「ジョーエ」曰く必らず然るならん君若し此等の石を以て左も右もして火を作り枯葉を集めて之を焼ば余の速かに料理して共に侶に美味に飽べし「ケチジョー」答へて曰く夫の甚だ速かに爲し得るとなり乃ち石を以て忽ち火を作り瞬く間に枯枝を集めて之を焼に火焰々として燃ゆ「ジョーエ」の羚羊の肉燻十二三切を作り且つ臘肉の細燻を取りて之を焙り二人共に之を食ふ其風味頗る美なり「ケチジョー」の思ふやう斯る美肉を邊兒月孫氏に與へなば必らず欣ぶとならん友愛の情漫に起り默然たる折柄「ジョーエ」の突然問を起して曰く君の何事を考かへたまふや「ケチジョー」曰く汝何ぞ忙はしき汝の肉を焙るに暇なきや「ジョーエ」曰く否々余の此肉燻を食ひ旨きに付て熱々思ふに我等若し氣球の所在を發見し得ざるべきの野蠻の毒手に陥りて此肉燻の如く喫はれんかと思へば美味も旨からず色々心配最中あり「ケチジョー」曰く夫の如何

なる考へずや汝の邊兒月孫氏が我等を打捨て立去ると思考や「ジョーエ」曰く爾にあらず或の礮の外れて氣球の飛去るともあらんかど掛念いたすなり「ケチジ」曰く左様の事の出来べき譯なし若し左様の事あるも邊兒月孫氏の再び氣球を降すに何の難きとあらん同氏の汝も知れる如く氣球を取扱ふの妙手ならずや

「ジョーエ」曰く爾ども風若し氣球を吹去らば如何に邊兒月孫親方が氣球運轉の巧手なればとて再び我等が在所へ降すとを得べけんや「ケチジ」曰く不祥の事の説を休よ今汝が假に定めたる如く一向氣球の見えずなりたり

此時一發の礮聲と共に彈丸の空中を飛行するあり「ジョーエ」大聲に呼んで曰くアレ〜〜「ケチジ」曰く彼の礮聲は我が所有の旋條銃を放ちしものにして余は能く其礮聲の工合を知れり此礮聲は豫て定めたる

急を報ずるの暗号なり又曰く我等は既に危難に陥らんとするならん「ジョーエ」大呼して曰く邊兒月孫親方の或は危難に逢たまへるの知るべからず何にしても猶豫しがたし「ケチジ」君よ早く馳たまへ二人は手早く獲物の肉など取集め元來し路へと引返し來りし時蹄途の標準なりとて迷はぬ爲に樹置たる枝折を目的に歩む程に林中の樹木繁茂りて晝尙暗き有様なれば格別遠くは距れざる氣球「ピクトリヤ」を見る能はず甲首か乙首かど見巡るうち又も聞ゆる礮聲一發耳を貫き響きたり

「ジョーエ」叫んで曰く事甚だ急に迫れり「ケチジ」曰く周章で樹根に躓くなかれ汝若し足を傷けて歩むと能はざるも我は汝を助け去るの暇なし「ジョーエ」曰く君周章たまふかと詞未だ終らざるに又も木魂に響く礮聲「ジョーエ」曰く此礮聲の工合を考ふるに恰も邊兒月孫氏が敵を

防ぐど覺たり君早く急ぎたまへ疾く馳せたまへど諸共に二人は虎に
 追るゝ心地荆棘を破り針を押し分け道なき道の嫌ひなく足に任せて急
 ぐ程に「ジョーエ」は荆に當りて顔を傷け大に呼て曰く「ケチジョー」君待た
 まへ如何に道を急げばとて我が怪我を顧みず捨て去たまふは情なし枉
 て暫く待たまへど云ど「ケチジョー」耳にも掛ず俚諺に言はずや我身の難儀
 には人を顧みずと汝早く來れよ些少の怪我は我歸りて後療治して得
 さすべし「ジョーエ」又死聲を出して曰く「衣服に懸りて進むわたはす
 「ケチジョー」焦思て曰く「衣服を破つて來るべし」「ジョーエ」云く「代のなき衣
 服を破りて何とせんと云内已に「ケチジョー」の聲遙になりたれば「ジョー
 エ」は衣服の破るゝも顧みず眼を閉て無二無三に茂林の中を走り抜け
 漸く樹立の間に出て遙に彼方を見渡せば氣球の元の位置に浮び邊兒
 月孫氏の泰然として乗輿の中に在り「ケチジョー」氏問て曰く「邊兒月孫君

よ开も如何なる事の差起りて斯く暗号を爲し玉ひしや「ジョーエ」叫ん
 て曰く「斯く早く氣球を見認たるの實に我等が大幸なりき」「ケチジョー」曰
 く「汝何を見るや」「ジョーエ」曰く「遙に彼所を見るに夥多の黒奴隊伍を爲
 て我が氣球を圍む様子なり」「ケチジョー」曰く「眞に然りと尙能く見れば二
 英里程距離たる處に三四十人の黒奴密集りて或の噪ぎ或の躍り「シカ
 モール」樹の下に隊を爲し既に其中の三四人の一梢高き樹枝に攀登れ
 り而して彼樹の氣球の掛たるものなれば甚だ危難の切迫せる有様な
 り「ジョーエ」曰く「嗚呼危ふい哉危ふい哉邊兒月孫親方の彼等を未だ見
 認め様子なり」「ケチジョー」曰く「ジョーエ」よ靜に我跡に尾て來るべし我等
 の樹上に在る四人の黒奴を殺すに我が手中に在り決して恐るゝに足
 らざるなり
 二人の息を切らして急走すると殆ど一英里又も氣球より打出す一發

の砲聲と諸共に今碇綱に縛付て攀登らんとせる大男に申りしと見え大男の死して樹枝より樹枝を傳ふて落來り地上より凡そ十尺許りの處に掛て両手并に兩足を下に垂れ風に吹れて動きたり

「ジョーエ」の足を留め大聲に呼て曰く彼れ見たまへ惡鬼の如き黒奴の既に樹枝に掛れりケテ「ジョーエ」曰く斯るとは余の少も心に關せず今の我上友の上にかゝる大事の場合なり疾々走るべし走らずやと共に進むと二十歩餘り「ジョーエ」大聲に笑ふて曰く今込種々ど心配して野蠻ならんと思の外長く垂たる尾を見たまへ彼の大なる猿猴なりきケテ「ジョーエ」曰く猿でありしころ僥倖なれざるにても我々を痛く驚かせぬるとの思しよ我の彼の死體を群集せる猿猴の中に投出たき者なり

此に至りて兩人の彼の群集たる者の犬頭猿なることを知たれども其容體の猛惡にして一見寒慄すべきものなれば一撃の下に打倒し得るの

様子なきを以て近かず元來此種類の猿の其頭犬の如く其鼻も亦た犬と同一なるに依て此名を當たるものなり然るに「ジョーエ」の頻に彼等を撃殺さんと欲せるを以て「ケテジョーエ」氏も奮起して二人一齊に銃を揃て猿隊の中へ撃込たれば響に應じて倒るゝ者八九疋残れる者の散亂して忽ち影を隠したり此時「ケテジョーエ」の樹下に到り繩梯を傳ふて登る跡より「ジョーエ」も同く傍なる「スカモール」樹に攀昇り碇の綱を緩めければ氣球の「ジョーエ」が立たる枝まで漸々に下り來りぬ「ジョーエ」即ち身を跳らして難なく乗輿の裡に飛乗たり已に三十分も過る項氣球「ピクトリヤ」号の大空に浮びて漸く上騰し進路を東方に取て駛る程に風除ろに吹來りて清涼を覺えたり

「ジョーエ」曰く今の攻撃の如何なりしや我等の邊兒月孫親方が土民野蠻の爲に圍まれたまひしならんと思ひたりき邊兒月孫氏曰く幸ひに

猿猴なりしを以て恙なかりしなりシヨエ曰く遠く之を望みし時
 猿群どの必らず思ひ玉はざりしならん又曰く我等の餘程近づく迄も
 更に猿兵どの思ひざりき邊兒月孫氏曰く現に爾もありしならん余の
 猿兵の攻撃に付き頗る危険にして心配なる一事ありたり夫の何事な
 りやと云に猿兵の來りし時彼等の手を以て破綱を引き震動すと屢々
 なるがゆゑ若し破綱の弛みて破の外れたらんに風氣球を吹送り
 天外遙に飛去らん然る時に汝等に誰あつて我が氣球の何の方向に
 向ふて飛去たりと告るものあらんや實に危険きとなりしケテジ曰
 くシヨエよ余の汝に氣球の飛去るとい決してなしと言たれど今に
 して思ひ見れば汝の詞却て其當を得たるが如し爾ども彼時は汝も口
 には爾言しもの、風味美き山羊肉の附焼の料理出來たる時なれば頻
 に其方にのみ心を奪われ余も亦た甚だ俄て食物の方に氣を取られ別

に甚だしき心配もせざりしが今將思へば思ふ程實にく、危険の事な
 りき

邊兒月孫氏曰く汝等は必らず奔走に疲れて既に飯を覺えたるならん
 而して山羊肉の附焼は餘程風味美ならんと思はるシヨエ曰く親方
 よ試みに之を食べたまへ晚餐の用意は疾に整ひたりケテジ曰く實
 に我口を以て其美味を述べんより寧ろ自ら食べたまひて我獲物の其風
 味誠に上品なるを知りたまへシヨエ曰く余は我が終身山羊の美肉
 を食ふて其美味に飽き其上グロツグ焼酎と水と混和しを飲みたきも
 のなりと詞の下に邊兒月孫氏はグロツグは出來たりとて一杯宛與へ
 ければ三人共に飲干て舌鼓なしつ飽足ぬケテジ曰く食事の時ば
 成るべく風の吹ざるを望む風若し吹ざれば食物胃中に落付て甚だ快
 よく覺ゆるならん

時に時辰儀は已に四時を報じ「ピクトリヤ」は大空の強き流動に依て飛
 が如くに進行し地上を離るゝ益々遠く風雨針を見るに海面を離るゝ
 と既に一千五百尺の高點に達したるを示したれば邊兒月孫氏は氣球
 中の瓦斯を成るたけ膨脹せしめんと勉めて竈の火を焚たり午後七時
 「ピクトリヤ」号は「カニエメ」ど云る海上に來り長さ十英里左右の原野に
 「パチパツ」ど云る大樹林を爲し其間に小村あるを發見したり村は樹
 木の影に掩はれて確乎に夫と見え判ねど村落なるとは判然たり熟々
 之を考ふれば此處は「ウチゴ」の一部分にして首領の居住せる場所なり
 此地は開化ますく退歩するの樣子を聞ざれば少は開進し居るなら
 ん然れども遂に望遠鏡を以て其内部を視察するに人も獸も皆な悉々
 く圓形の小屋に雜居し其小屋も木材を以て之を建す其形恰かも乾草
 を入る小屋に異ならず聞處に依れば此地の開化なるに似合ず人民

を奴隸に賣ると甚だ稀なりといふ地味乾燥て岩多くムダブルと云る
 處より僅か距れたる處の地味餘程膏腴なりと見え其地に生長せる植
 物は頗る繁茂して其色最も美なり此時日己に没し風亦全く死して恰
 も空氣は眠りたるかと思ふ計の有様なり邊兒月孫氏の益々氣球を益
 く上げ空氣の流動強き處を見出さんと試みたるに何の場所も空氣の
 流動するとなければ同氏の氣球を一千尺の低處に下して終に此夜を
 送らんと決心したり此夜天晴て一點半箇の雲なく星の光爛々として
 眼を射る「ピクトリヤ」号の静止して全く動かす「ケネシー」并に「ジエー
 エ」の程よき場所を見付け各々眠に就しが二人の閉眠の雷の如く邊兒
 月孫氏が耳を煩はして爲に睡る能はざらむ已に夜半になりしとき
 「ケネシー」氏が張番の順番なりとて起されければ「ケネシー」氏の漸く起
 上り目を揉りながら邊兒月孫氏に代りたり邊兒月孫氏曰く假令如何

なる僅少の出来事なりども若し差起りなば必らず我を起したまへ就中君が注意すべきの風雨針なり是の我等が路案内者にして進退動作何事も皆な之に任すものなればなり
 此夜甚はだ寒く寒暖計を見るに晝間と夜間の度數二十七度の差を生じ更なるに従ひ饑餓に因て洞中を出たる動物の聲遙に聞え蛙の豪狗の吠る聲に和して喧すしく獅子の長く嘯いて其間に一種の調子を混ぜ何となく物凄き動物の令奏に異ならぬバケテシー氏の爲に慄然として身の毛の彌立を覺へたり已にしてケテシー氏の張番時掛を終りたれば邊兒月孫氏の起てケテシー氏に代りしが時に風の方向夜中に全く變更たる模様なれば磁石を見るに北東の方向に向ひ二時間余に氣球の旅行すると大凡三十英里下界の即ちマバレガルドと云る土地なり此處の土地全く岩石を以て成り皆な黒色の花崗石にして光澤

頗る美麗形圓椎を爲す者多く恰も僧侶の帽子の如し地上に白く晒されたる水牛及び象の骨多く散亂し東部を除くの外樹木甚だ少なく東部の森林繁茂して村落其間に包まれたり
 邊兒月孫氏曰く我等は今正路を取れり此處のシホーラムコアと云る處にして危険の場所にあらねば一度下りて窟中に水を入んど欲すれば少時此處に留まらんと思ふ早く磔を何にか掛るの工夫を爲したまへケテシー應て曰く余の磔を引掛べき樹木あるを見ず爾ども先づ試むるに如かずシヨイエよ早く磔を卸せよ時に氣球ピクトリヤ号の漸次昇騰の力を失ひ方に地上に近づき磔の已に地に達し此處彼處と引摺る内一挺の磔の岩石の間に掛り磔と氣球の浮動を留めピクトリヤ号の静止したり邊兒月孫氏の時に地圖を開きて委しく地勢を察するにシホーラムコアの近傍に夥多の池あるを記したればシヨイエの直

に乗興より下りて處々を走廻り間もなく細小の村落に近き處に一箇の水溜あるを發見し其水を汲取て急ぎ歸り來れり其途上に發見したるもの象を捕ふる爲に作り設けたる陷穽なり「ジョーエ」の殆ど一箇の陷穽に陥らんと志たりしが幸ひにして危難を免かれ其内を見たるに半分食ひたる様に見ゆる象の死体ありたり菓物の猿の最も嗜める拘杞の如きものを見たるのみにして他は彼が發見中に記入すべきものなし「ジョーエ」此菓物を持歸りて邊兒月孫氏に示せしに同氏の「ジョーエ」ラ、ムコアの西部に産する一種の樹木にして「ムベンブ」と稱するもの、實ありと知れり

邊兒月孫氏の此處久戀の地にあらねば早く飛去んと思ふ折から「ジョーエ」が働きて水も難なく得たるのみならず氣球の地上に離るゝと甚だ近きが故に繩梯子も直に地上に達し容易に之をも積入れ「ジョー

エ」も礎を外して迅くも邊兒月孫氏が坐右に飛來りたれば疾や進行を始めんと急に火力を増すに従ひ窻中の水の忽ち沸騰り「ピクトリヤ」号は再び空中に浮びて漸々旅行を始めたり既にして下界を見れば「カゼー」と云る地より大凡百英里有餘の處に來れり此「カゼー」と稱ふる地の中央亞非利加にて一箇の大切な場所なり風の南東に吹去り氣球の飛ぶと速かなれば此日中に至らば空中旅行者の必らず「カゼー」に到着すべしと思はれたり今「ピクトリヤ」号が進行の速力の一時間に大凡十四英里以上の割合にして左右する間に土地甚だ高層なる處に達し氣球の取扱ひ方尤ひ六ヶしけれど邊兒月孫氏の球中の瓦斯を餘り膨脹するを欲せざれば巧に氣球を運轉して險阻き山路の背後に傍ひて此處を通過ぎ遂に「アンボ」及「ピチュラ、ヴェルス」の村落に近づきたり「チュラ、ヴェルス」村の「ウンヤム、ウエシー」の一部分にして地味頗る清美を

極め幅廣き大樹を生じ中に就て殊に「カクチ」と稱ふる樹の最も巨大なる者にして實に驚くべきものとす

邊兒月孫氏の自分の日記を開き見て曰く我等が「ザンシパール」を發程せるは午前九時にして未だ僅に二晝夜なるに己に旅行したる路程の横路を籠めて既に五百英里を過たり爾バ此處に即ち「カゼー」なり昔時を回顧れば「バートン」及び「スモーケ」の両氏も我と同一の線路を取たるも徒歩にて旅行したるが故に此「カゼー」に達せるに四月半の日數を經過したりき

第八回 蠻民訝二輪婦娥 一條大漢閃空中

却て説く「カゼー」は中央亞非利加に於て一緊要なる場所なれども市街を爲るものにあらず且其内部に於て市街と稱すべきもの一として有るなし唯「カゼー」は六箇の巨大なる洞穴の集合たるものにして人民悉

く洞穴の中に栖ひ洞の中には家の素より奴隸を入れるの小家あり庭の如きものありて結構頗る其意を用ひ葱、甘藷、甜瓜、藟等の植物を栽培し其風味最も美にして何も充分に生長せり「ウンヤム、ウエシー」は月の邦と云る意にして亞非利加洲中に就て頗る豊饒美麗の園圃なり此地の中央「ウンヤ、チムベ」の地方には亞刺比亞國純粹の人民より分れたる種族「チマニ」の民族其栖棲を定め無爲安然に其日を送れり此民族は永く亞刺比亞、亞非利加兩洲の内部と交易を營み其商品の重なる者は護謨、象牙、印花布「カリコ」の織物等にて嗚々奴隸を賣買す此赤道直下の地方は絶えず隊商往來し榮耀品より食物に至るまで處々方々を搜索て之を此地の商人に賣を常とせり亦も此地の商人は何も富有にして夥多の僕婢を使役ひ最と安樂に其日を送ぬ實に現世の極樂淨土にして貴賤上下の差別なく終日相集りて優遊談笑烟草を吸ひ酒を酌み或は

眠り或は起き或は舞ひ或は語り遊び戯るゝを以て業とせり
 而して洞外なる廣き場所にて市場を開き盛に交易を爲す野には麻
 類多く繁殖り園には種々の植物あり大樹は雲を凌いで中天に聳へ緑色
 青々眼を慰め樹陰清涼にして香氣人を侵し其快樂なると能く口筆の
 尽し得べきにあらざ此處は常に隊商の集り來る處にして南よりする
 者は奴隸を率ゐ象牙類を運輸し來り西よりする者は綿布の種類を持
 來り又或は大湖の周圍に栖住する民属に賣捌かんと目的にて夥多
 の硝子小玉を運送し來る其市場の有様は交易の事よりして常に喧嘩
 の絶る間なく甲論乙駁器々擾々争論喧嘩の聲に和して更に喧鬧さを
 添ふるものあり一々之を述んに半腰の黒麥酒を飲いで大聲に叫ぶ者あり
 酔て語り醒て舞ふ太鼓の音喇叭の聲小驢は鳴き大驢は嘶く婦人の陸
 續群を爲て口姦しく語る傍に飢を呼て泣く小兒あり或は「ジャマダル」

製の蘆笛を吹ものあり又市場なる商賣品の有様を見るに商品の皆悉
 其順序を逐て整列るとなく一々亂雜を極め笑ふべきの模様なれども
 商品の種類を云バ茶褐或は淺黄色の絨物に續きて硝子小玉象牙犀角
 一角蜂蜜烟草木綿等なり而て其商賣の方法尤も奇々怪々を極め物
 品の價格の買人の多少に依て之を定むるものとす譬は爰に象牙あり
 一人之を買んと欲し某々の物と換んと云ふ賣者大呼して誰か又別に
 此品を欲するものなきやを問ふて難賣す別人若し之を買んと答へ前
 者より更に善き品を出して之に換んとをいふ已に其買人と取引を濟
 したる後又別人あり尙善き品を出して之に換んとを言出せば先に換
 たる者より無理無休に取返し第三番の者に渡すを例とす斯る方法な
 るを以て争論絶る間なく唯喧嘩に時間を費し幾日経ども賣買の落着
 ひ甚だ六ツかしき有様なり然るに何故にや此市場の騷擾の間もなく

止て寂寞となりしかば氣球ピクトリヤ号の徐々に降り始め其線路を
 誤るとなく市場の上に降り來れり此時老弱男女奴隸商人亞刺比亞人
 亞非利加黑奴等の皆其樓窟に退き隠れ一人として影だに留めず
 「ケチジー」氏曰く邊兒月孫君よ今我等が上より見たる如き此地の人民
 が商賣の有様に就て考ふるに喧嘩ども争鬪ども名狀すべきの詞なし
 假令此地の人民の如何に善良なればとて到底斯る有様にては共に交
 易を爲すの却々難き事と思はる音に難事なるのみならず決して出來
 べき筈なし」ジョーエ曰く余思に此等の人民と商賣するに就て容易く
 行ふべき一の名策あり开の如何にと云に我等は徐々に此「ピクトリヤ」
 號を市場に下して高價き品のみを手當次第掴み去り天上遙に昇騰ん
 ば如何に彼等商人と争ふの難義もなく一握千金再攫萬金愉快と云も
 餘あり斯る事ころ人間を富すべきの良法なりとす

邊兒月孫氏曰く「ジョーエ」よ汝が説所の方法は頗る其當を得たるが如
 きも其商品を取去に當つて彼等の中誰か一人我が「ピクトリヤ」號を發
 見て仲間の人に告もせば彼等必ず憤怒りて直に洞を飛出し我が氣球
 に迫るべし甚だ危険き事ならずや」ジョーエ曰く親方の詞に據る時は
 甚だ危険き至なり邊兒月孫氏曰く我等は高處に在を以て假令土民の
 奮起して急に我等に迫るとも疾く之を認め得べく爾のみ恐るゝには
 足らざるものから所謂危きに近らず元來我が「ピクトリヤ」號は戰闘に
 用ゆべき甲鉄艦にあらざれば彈丸或は弓箭を防きて十分其用に充べ
 しとは保證がたし「ケチジー」氏曰く邊兒月孫君よ足下は此地の亞非利
 加人と共に實際を爲さずして直に他所に飛去るの積なるや邊兒月孫
 氏曰く余は此地の影况を見るに亞刺比亞國民の多く住居せるが如く
 而て此亞刺比亞人民は餘程開化の域に進み爾迄野蠻の者にも非ず爾

ども我曾て聞く「バートン」并に「スペツケ」の両氏が此地の人民に激烈なる攻撃を受け頗る難艱を嘗たりと故に交際を爲すとても深く注意せざるどきは甚だ危き限なり

右の如き空論虚談に思はず時を移しければ「ピクトリヤ」號は次第に降りて垂たる礮は忽ちに市場に近く聳へたる大樹の枝に掛りたり此時「カーゼ」の人民は「ピクトリヤ」號が降り來れるを見て洞中より這出て蟻の甘きに就が如く須叟の間に集會ひ圓形に居併びつ中より數人進み出たる者あり身には圓推形の貝殼細工の飾粧を附たるを以て「ワガンナ」なることを知れり「ワガンナ」どの此地に於て上位を占たる一種の僧侶なり各々帶に小さき黒色の瓢箪を附け如何なる用に充るやは知らざれども聞處に據ば何か魔術の用を爲すものなりといふ野蠻の群集の益々多く僧侶が四邊を圍みて太鼓を鳴し手を拍ち謠ふが如きものあり踊るものあり狂叫亂呼の其聲の天地に響きていと凄し

邊兒月孫氏曰く彼等が斯く踊り斯く謠ふの我等を慰むると覺たり我れ若し危難に逢の恐おければ余の彼等が仲間に入て年來稽古したる舞踏を爲し彼等の眼を驚かすべきに「ジョーエ」曰く邊兒月孫親方よ爾のみ恐れ玉ふに及ばず余の彼等を欺かんと甚だ容易し邊兒月孫氏曰く「ジョーエ」よ彼等の必らず汝を以て上帝なりと思ふなるべし故に早く試みに地に下れよ「ジョーエ」曰く余の必らず之を爲し得べし思ふに彼等の我か善き舞踏の仲間なり

左右する間人民の舞踏を止め風の風たる如く静まりて首領と覺しき者一人進み出て我等空中旅行者に對ふて何か一語を發したれど如何なる意味か解し得ず是に於て邊兒月孫氏の豫てより習ひ得たる亞刺比亞語を以て七八語を發したるに群集の中より亦た亞刺比亞語を以

て之を答へたり其意味十分解し難けれど土人の「ピクトリヤ」を月と思ひ月の三人の子息を引具て此下界へ來降せるものなりと思ふの意なり开も此地の人民は常に日月を尊敬する一種の宗教を奉ずるものから氣球を月と思ひ空中旅行者の三人を月の子息なりと誤認し尊敬せんが爲め又慰めんが爲め太鼓を打ち舞踏を見せ其意を表せしなり邊兒月孫氏の益々彼等を欺き且つ愚弄して危険なる空中旅行の幽鬱を散せんものと思ひ自ら尊大に構て曰く月の一千年毎に一度領内の帝國を巡回するを常とせり今正に一千年に當れるを以て近く地上に降り信向者に我が身体を見せんとす且汝等人民が望に任せて何事にまれ満足せしむべければ服職なく我に告よ余の必ず汝等を救ひ得さすべし一人の僧侶低頭平身邊兒月孫氏を敬ひ誦んで答て曰く我國王「ムワニー」の豫てより病に罹り愈ざると茲に年あり我等臣民天に祈る

と數百日未だ其効驗なし仰ぎ願くの大慈大悲の月の子息よ何卒駕を枉て國王の病を見舞給はらば我々の幸福之に過ず邊兒月孫氏の仕濟したりと心の中に笑を含み开い最と容易き事なり直に見舞て遣る程に疾々案内すべしと云ふ「ケチジ」氏曰く君の眞に彼所に行て黒奴の王を見舞ふ積なるや邊兒月孫氏曰く余の勿論行んと欲す思に彼等の格別惡き人民に非ざるべし且今日の空氣甚だ静なれば「ピクトリア」號に就て恐怖るべきの一事なし「ケチジ」氏曰く开も君の如何爲し玉ふの心ありや邊兒月孫氏曰く「ケチジ」君よ決して恐怖たまふとなかれ余の些少の藥餌を以て容易に彼等を欺かんとす此時群集に向ふて大聲に呼て曰く月の「ウンヤムシー」の人民に對し大切なる國王の病氣を憐むと實に深し故を以て我等の今其病氣を療治し得さすべし速かに王宮に行て我等を對遇すべきの準備を爲せよ

此一言を聞よりも群集たる人民の歡善限なき有様にて再び起る舞踏
 歌曲雜沓の様を形容すれば恰も海面に黒波の搖くが如し邊兒月孫氏
 のケチジョー氏及ジョーエの二人に向て曰く我親愛ある朋友よ我等の
 萬事に注意せざるべからず我が王宮に行たる跡のケチジョー君の乘輿
 の中に留り常に竈の湯に注意して十分氣球を昇騰し得る力を保たし
 むべく而て礎を確と樹の枝に繋ぎ置ば何一つ恐るべきの事なし又シ
 ヨーエの余と共に地上に下り梯子の下に止りて張番をな怠りるケチ
 ジー氏色を作て曰く君の唯一人にて彼の野蠻國王を見んとせらるゝ
 やジョーエ曰く親方の何故に王の許まで余を伴ひたまはざるや邊兒
 月孫氏曰く余の單身にて行んと欲す彼等野蠻の人民の此ピクトリヤ
 号を以て月ありと思ひ詰り誤謬の思想腦底に染み女神の我を救んと
 來降したるなりと五里霧中に迷ふものから決して恐怖すべきとなし

我が防禦の彼等の腦底に附着したる則ち迷の心なり爾る間に足下等
 二人の乘輿と梯子の下に留り心安く我が歸るを待たまへ余の何事も
 足下等二人に請合たれば決して危険み玉ふなかれケチジョー氏曰く君
 の詞を聞て余は甚だ安心せり邊兒月孫氏曰く君能く瓦斯の膨脹に心
 を注たまへケチジョー氏曰く慥に承知せり

此時土民の群集して氣球ピクトリヤ号を指て集り來り呼つ叫つ何事
 か月の子息と思違へる空中旅行者を慰むる模様にて切に月の救助を
 得んと欲し助け給へ救ひ給へと彼が邦語を以て之を呼たり彼等が云
 ふ所の詞に付ての唯邊兒月孫氏のみ之を解し得ると雖も他の二人の
 全く其何たるを知らず
 「ジョーエ」大呼して曰く笑ふべし笑ふべし彼等が爲す所へ此ピクトリ
 ヤなる満月并に我等嫦娥の子息に向ふて甚だ無禮なる有様ならずや



遊見月孫氏土氏招レカレセノ王宮ニ至ル

邊兒月孫氏曰く汝の此地の風俗を知らざるが故に彼等が所爲を以て
 失禮なりと思ふべけれど余が曾て讀たる亞非利加事情と題せる書中
 に此等の事實を記載せり汝の書を讀むと甚だ少なきに依り斯る誤謬
 の思を爲す空中旅行を終りて歸國の後日夜學問に従事して今少し
 世界の事情に通ぜざれば共に語らんと欲するも得べからざるなり
 恁て邊兒月孫氏は手に小さき藥籠を携へ徐々として梯子を下り己に
 地上を歩むときいろも同氏が生れてより未だ曾て爲さざる所の傲慢
 無禮の風を粧ひ自ら尊大を極め「ジョーエ」と共に笑を忍びて七八歩進
 みしころ土民の蟻の如く集り來り同氏が足下に平伏て左右の足に抱
 き付き或の手を吸ひ腰を擁し敬禮する有様の恰も土耳其の人民が國
 王に對するの禮式と大同小異なり暫くありて人民の一同に起上り同
 氏の周圍を擁護しつ種々様々の音樂を奏し巫女の如き婦人の神樂の

踊を爲し徐々として練行く様の奇しくも亦可笑げなるの驚くにも猶ほ餘あり爾程に邊兒月孫氏の夥多の土民に擁護されて漸く此地國王の「テンベ」の意に近きぬ國王の「テンベ」の「カーゼ」の市場を距ると遠からず既に午後三時とも覺しき頃頓て「テンベ」に着たるに國王が庶生の一子の門の入口にまで出迎たり同氏の愈よ尊大に構へ甚だ失禮なる挨拶を爲し徐に宮殿に入たるに彼の國王の一子にして王位を繼ぐべき少年の足下に平伏て禮を爲す却二十分間も過し頃風流なる客間に請して此地に産する植物果物など處狹まで積併へ管侍頗る懇篤なり之を食ふに其風味最も美にして何れも譬がたし暫時ありて國王の寢室に導かんを述るに休り誘はれて王室に至る王宮の小丘の半腹に位し方形の建方にして土民の語に之を「イチランヤ」と稱す英國の「ヘランダー」と稱するものに似て屋根の茅葺にて四隅の木の圓柱を以て之を

支ゆ此柱の彫刻せるものなりと土民のいへど外面より見るときは唯
 何か塗て少しく彩色したる様にのみ見えたり壁の赤粘土を以て塗り
 種々の裝飾をなし其畫るものには人物あり蛇の類あり其細工の質朴
 にして却て大に風韻あるを見る中に就て人物の頗る眞に迫り人の眼
 を驚かす計なれど蛇の類は所謂蛇足の飾多くして却々に面白からず
 而て屋根の直に壁に密着す壁と屋根との兩間に廣き隙ありて大氣の
 流通に便ならしむ素より窓といふものなければ出入口に戸と云ふへ
 きものなし此處に至て邊兒月孫氏を對遇すと愈々厚く國王ワンヤム
 ウエシーの人品尤も美麗く中央亞非利加人民の純粹なる種族にして
 軀幹強大容貌の温和なると思ふに似ざる有様なり頭髮の之を數多に
 區別して各々之を結括め其長きと垂て肩に至り鬚鬚より口頭に至る
 まて黒青両色なる一本の線を黥せり其耳朶の驚くべき長きにして護

謨漆を以て塗たる厚き圓板を以て下より之を支ゆ衣服は「カリコ」を以
 て裁製て其色尤も燦爛あり兵士の國王の周圍を護衛して身に「アツサ
 ガイ」鎧の如を穿ち左手に弓并に鈎金附にして「エウフナルピヤ」ど云
 る毒草の汁を着たる矢を携へ右手に戰鬪に用る小き斧を提げ腰に
 「シーム」ど稱する鋸刀齒の長き劍を帶たり邊兒月孫氏が室に入し時
 の國王の病勢甚だ篤くして最早如何なる名醫も之を投げべき有様な
 り室の鴨居には班馬の皮并に兎の尾を多く掛け國王の周圍に居併び
 たる夥多の婦人の邊兒月孫氏の入來るを見て接待頗る意を盡し「エバ
 チエ」ど稱する樂器を彈ず此樂の銅の板を以て作りたるものにて最も
 美音なり又た之に和するに「キリンドウ」ど稱する太鼓を打たり此太鼓
 の其高さ六尺餘にして之を大なる木の幹に釘付になし二人の上手な
 る太鼓打撥を擧て之を打つなり國王の周圍に居併びたる婦人の何れ

も容貌醜くからず多くの笑を含み媚を献じ黒色の大烟管にて烟草或
 の麻の葉を喫み衣服の長くして床上に垂たる長き上着を着し下に
 毘羅巴人の胴服に長き切を附たる様のもを穿ち其形容奇妙なり其
 婦人の小なる六人の室の隅なる柱に倚て面色宛ら土の如く餘程の愁
 を含める有様にて他の婦人の如く喜こび勇むの色見えず精しく之を
 聞くに此六人の婦人の國王若し逝去せば未來の世界即ち冥土黄泉に
 於て孤獨の徒然を慰め奉つらんため國王の墳墓の中に生かから理葬
 せらるゝものなり邊兒月孫氏は室内一般の摸樣を熟覽し終り頓て國
 王が病臥したる木製の臥床に近寄りたり熟々國王の顔色を見るに已に
 四十の坂を三つ四つ超たりと思ふ計の人にて病發の原因は長夜の宴
 に耽り牛飲馬食酒の爲に斯く身体を損傷たるの容体にて病臥すと數
 年に亘り病發したる後も矢張飲酒にのみ耽りたるより日頃は遂に身

体の諸感覺を失ひ唯呼吸の通ふのみ其他は死人に異ならず爾れ此
 病氣は假令世界中の「アンモニヤ」は如何なる種類の者を用ゆるとも再
 たび國王をして元の健康に復せしめんと思ひもよらず枕頭後邊に待
 ぬる國王の寵臣を始として看護に暇なき夥多の侍女等は皆な跪坐
 頭を低れ黙然として手を束ね互に眼と目を見合して云ふは言はぬに
 ます思悲嘆爾こそ邊兒月孫氏は漫に哀を催ほしつ疾や療治し得さ
 せんと手に携へし藥籠が強心劑を取出し六七滴を水に混てやをら國
 王に服せしに藥の効驗過またず頓ての事に國王は微に四肢を動か
 始め今まで一として生活ある人間とは思はれざるの死骸の如き身体
 の遽然に微動を現したれば居併ぶ男女は忽ちに愁の眉を開きつゝ邊
 兒月孫氏を伏拜み何か解らぬ邦語を以て皆な異句同音に稱賛す詞は
 志ばし鳴も止まず元來國王の病氣は危篤に迫り身体甚く衰弱て耆婆

扁鵲の術ありども到底救ふべからざる不生必死の難症なれば一時は
藥の功力に依て快復の摸様に見えたるものから終に眼を閉ぢ四肢を
龜めて歸らぬ旅に赴きけり邊見月孫氏は之を見て由なき事をしてけ
りと心に少しく鬼胎を生じ人民が忿怒んも計り難しと直に馳て王宮
を出てピクトリヤ號の在る所に向ひ足を急めて立去しは巳に午後六
時にして黄昏近き頃なりき

案下休題單表「ジョーエ」は邊見月孫氏が留守中摺子の下に張着して寸
歩も其處を動かさず去らず群集ひたる人民は「ジョーエ」を尊敬すると厚
きより「ジョーエ」は面白き事に覺え威儀を正し風俗を粧ひて眞に婦娥
の子息なりと思はしめ尊大の中に自から温和の容体を含みたるを以
て群集の人民は之を敬し且つ愛するの心を生じ殊に黒奴の婦人は瞬
きもせず「ジョーエ」の顔を見詰て片頬に笑を含み頻に愛慕する有様な

り「ジョーエ」曰く年若き婦人等よ余を拜して早く去るべし余は柔順な
る女神の子息なれども性來猛惡なる一種特別の鬼神なりと威す詞の
解りしにや群集なしたる人民は何か相談する様なりしがやがて四方
に散亂し「ジョーエ」の姿を回顧々々各々棲窟へ歸りし間もなく大麥と
「ボンベ」を以て釀製たる一種の麥酒を持ち來り恭々しく「ジョーエ」に
贈る「ジョーエ」其辱けなきを謝し以爲く斯く長く佇立て徒然なれば
豫て好物の酒こそ願竟なれイデヤ一抔引掛て日來の鬱を散せんと酒
の強弱をも顧みず土製の杯に盛たるまゝ只一口に呑み干たりしに其
の強きと云ん方なく豫て「ジン」或は「ウスキ」等の強き酒は飲み馴たれ
ど争て此強きに比すべき上願下願は強きに堪て開きもならず閉もさ
れず眉を寄せ眼をしばたゝき堪ゆる顔は宛も是れ百面相のボンチ西
洋戯畫の如く奇妙不思議の形を爲し何とも名狀すべからず群集の人

民は呆れ惑ひ开も月の子息は如何にして斯る顔をなすやらんと微く
 笑を含み居たり其中より年若き婦人は最も調子よき聲を振立て「ジョ
 エ」が周圍を取巻いて神を慰むるに用ゆる舞踏を催し且謠ひ且つ踊り
 其心を慰さめたり「ジョエ」曰く汝等は斯る身振を以て踊り稱するか
 いしらざれど余は斯る面白からぬ事を見るどて長く此處に止まるを
 欲せず余は今我が國に於て流行する踊りを踊りて汝等に見すべし眼を
 拭ふて觀物せよ「ジョエ」は兼て踊の何たるを知らざれども亞非利
 加麥酒の酔に乗じて自由自儘の踊を始めたり其踊り方の驚ろくべく
 笑ふべく奇妙稀有なる踊にして元より無法無式なれば或は廻ると獨
 樂の如く或は蹴るとく亞刺比亞馬の怒れるかど訝るべく足を上げ手
 を回し起たり居たり轉びたり叫びつ呼つ狂ひに狂ひ千變萬化に顔を
 變化し其狀古今無類なれば群集せる亞非利加人の其奇妙奇体なるに

驚き月世界に於て神達の踊りたまふ踊と云るの斯るものかど感心し
 て腕を又き眼を睜り手に汗握りて目詰居たり「ジョエ」の散々に踊り
 狂ひ騒ぎ狂ひて疲れ果て身体宛ら綿の如く遂に其場に蜘蛛伏ければ性
 質猿の如き亞非利加人の好んで人真似を爲すものから群集たる黒人
 の各々起て月の子息が踊りの方法を似せつ、漸く踊を始め手に手足
 の動作により叫呼の聲に至るまで悉皆無法なれども似せて全く異な
 らざりしに現に不思議の舉動なり「ジョエ」の斯く土民等を玩弄び遊
 戯極度に達せし頃彼方よりして邊兒月孫氏が遙に歸り來るを見る其
 有様の土民頗る忿怒を帯び送り來るが如くなれば「ジョエ」の岸破と
 起上り天を仰て「ケテジ」氏に謂て曰く如何に「ケテジ」君よ土民の何
 か邊兒月孫親方に敵對の有様なり如何なる事の起りしやは知らざれ
 ど必ず月世界の醫師の手に於て國王の不幸にも黄泉の客となりたる

なるべし君の爾思はずや「ケネジー」氏の「ジョーエ」が詞の適に聞えざるにのあられざれども遂に邊兒月孫氏が危急に迫るの有様を見て左やせん右やど心のみ急立つものから如何にせん身の乗輿の中に在て地上遠く離れたれば唯空しく心配するのみ他に詮術なかりけり此時氣球「ピクトリヤ」号の竈の湯極度に沸騰り昇騰の氣熱益々烈しく張切る計に錨綱を引張り昇騰の用意十分に整ひたり間もなく邊兒月孫氏は梯子の下に馳來りしが士民の國王を亡ふて忿怒甚だ激烈なれども迷心全く解散せざれば邊兒月孫氏を害せんと思ど恐怖て未だ手を下さず空しく狂叫乱呼して跡の方へと退きたり邊兒月孫氏の虎の尾を踏み蛇の腮を脱れし心地して手早く梯子を攀登る「ジョーエ」も續いて登り來り二人共に先づ無難に氣球の内に歸るを得たり

「ジョーエ」の邊兒月孫氏に向ふて曰く今のしも危しく寸時も爰に停

まるへからず邊兒月孫氏曰く錨を外すと決して心配するに及ばず到底綱を斷放ち錨を捨て去らざるべからず併し暫く待つべきなり「ジョーエ」曰く一体事柄の如何なる譯か「ケネジー」氏の旋條銃を手に構へ眼を圓くして下界を睥睨て曰く开も如何なる事の起りしや邊兒月孫氏の水平を指して曰く彼處を見たまへ「ケネジー」氏忙はしく問て曰く何物を指たまふや邊兒月孫氏笑ながら答へて曰く余の一輪の明月を指せるあり

此時玉兔の樹開を洩て大空遙に輾り上る其色深紅にして頗る美麗なり之を英國に於て形容せる如く恰も火の玉の地上より登るに似たりと云んか今の月輪二箇となり一の樹上に懸れる「ピクトリア」號一は今大空へ輾り上れる眞箇の月輪なり無智蒙昧の亞非利加人民も爰に至りて始めて悟り偕に三人の空中旅行者の詐偽の醜神なりしかど忽ち恐

怒の状を現はし下界の動搖大方ならず「ジョーエ」の今迄笑を忍びて下界の有様を俯望居たるが今の餘り可笑さに堪えずやありけん思はず大聲を發して一時に動と失笑たり「ガゼ」の人民の自分等を欺むきたる怨敵の早くも空中に逃れるを怒ると益々烈しく怒聲囂々天地に響き或の弓に矢を挟む者あり或の小銃を提げて撃落さんと構ふる者あり其時土民の教導者の手様を以て衆人が兵器の準備を鎮撫たるに一同其旨を奉じて兵器を地上に投捨てたり教導者の唯一人錨綱を捉へて氣球の乗輿に入らんと欲し樹梢に登ると猿猴の如く己に錨の掛りたる樹枝に達せしかば「ジョーエ」は準備の小斧を押ツ取り奮然として起上り錨綱を斷んど身構へたり邊兒月孫氏急に留めて曰く暫く待つべし「ジョーエ」曰く此の憎むべき黒奴の酋長の將に乘輿に登り來らんとす坐して待たんは甚だ危し邊兒月孫氏曰く錨綱を切るは何時に

ても出來べきとならずや思ふに綱も切らず錨も捨ずして無事に濟むべき方法あらん此時黒奴の教導者は早くも樹枝に攀上り錨の掛れる枝を力に任せて折ければ兼て十分に引張たる錨は氣球の昇騰に従ひ烈しく引揚る其機會教導者は錨の爲に左の股を引掛られ恰も馬に跨りたる如く錨の上に乗しまゝ「ピクトリア」号は揚々と何の遠慮も荒風に吹れ漂よひ大空へ雲を霞と昇りたり
譯者曰く此篇已に旅行者が少しく奇怪の事を始めたり然れども未だ佳境に入しと謂ふべからず次編に至らば種々の艱難に遭遇するの有様に説き入り從來人の探り得ざる亞非利加内地の佳境に入らんとす畢竟彼の錨に乘られ空中遙に引上られたる教導者の成行如何ならん次編に説出るを聴ぬかし
亞非利加内地三十五日間空中旅行卷之二 畢

明治十六年八月十六日板權免許
同 年十一月一日出版

〔定價二十錢〕

編輯人

德島縣士族

井 上 勤

赤坂區赤坂新町三丁目
二十四番地寄留

出版人

東京府平民

宏 虎 童

京橋區三拾間堀壹丁目
二番地

發兌元

東京々橋區三十間堀
貳丁目壹番地

繪入自由出版社

賣 捌 所

東京馬喰町 山堂
 全長谷川町 武田平次
 全神田雉子町 々々堂
 全人形町 法木德兵衛
 全横山町 岡文助
 全彌敷町 信文堂
 全同町 報益社
 全日本橋通三丁目 丸屋鉄二郎
 全室町三丁目 稽堂
 全新芳町 良明堂
 全本郷湯嶋切通 福字堂
 全大傳馬町一丁目 指金堂

全柴井町 松井忠兵衛
 全濱町二丁目 高崎脩介
 全通三丁目 秩山堂
 全銀座四丁目 山中喜太郎
 全三嶋町 山中兵衛
 全通一丁目 大倉孫兵衛
 全木挽町一丁目 萬字堂
 全高橋通 松原江堂
 全日本橋西川岸 須原鉄二堂
 全日本橋通三丁目 丸善堂
 全下谷東坂町 時事出板社
 全淺草茅町 北澤伊八

全芝琴平町 靜霞堂
 全銀座四丁目 博聞社
 全通二丁目 小林新兵衛
 全横山町二丁目 内田彌兵衛
 通二丁目 北島茂兵衛
 南傳馬町二丁目 葛屋吉藏
 芝森元町二丁目 永樂堂
 麴町區飯田町二丁目 日月堂
 芝新櫻田町 春陽堂
 兩國吉川町 大黒屋平吉
 大傳馬町一丁目 三宅半四郎
 日本橋通一丁目 伊勢屋金二郎

池ノ端仲町 勝々堂
 芝濱松町 伊勢屋勝藏
 日本橋村松町 萬字屋鍋太郎
 南傳馬町一丁目 攝陽堂
 人形町通長谷川町 具足屋熊二郎
 全和泉町 平野屋周藏
 兩國米澤町 澤川屋良介
 淺草茅町 森本順三郎
 通油町 水野慶三郎
 牛込肴町 澤野彌兵衛
 横濱太田町 伊勢梅
 武州八王寺驛 熊澤傳四郎

遠州濱山	三州豐橋	下總國	大阪備後	常州水戶	上州高崎	尾州名古屋	常州土浦	全境町	高知種崎	岩代福嶋	羽後酒田
山嶺下	立	岡	柳旦	柳泉	石屋本	柳旦	山中	澤本	副田	嶋町	小池
仁	真	嶋	堂	風	版	堂	專	駒	文二	通十一	榮藏
平	舍	支店	支店	舍	社	本店	介	吉	郎	目	

豆州三島	上州高崎	遠州濱松	札幌縣	信州上田	加賀金澤	陸前石	三州岡崎	江州大津	西州今	西州源	西京寺
山本	柳川	中村	小樽	野	牧野	卷	淡馬	今	源	源	町
與	風	利	庄	作	野	利	月	源	源	源	通御
重	舍	次	兵衛	平	平	兵衛	堂	二	二	二	池下

終

夢野